



二日目 : Ballyconnell と Belturbet

(Oct 05, 2024 更新)

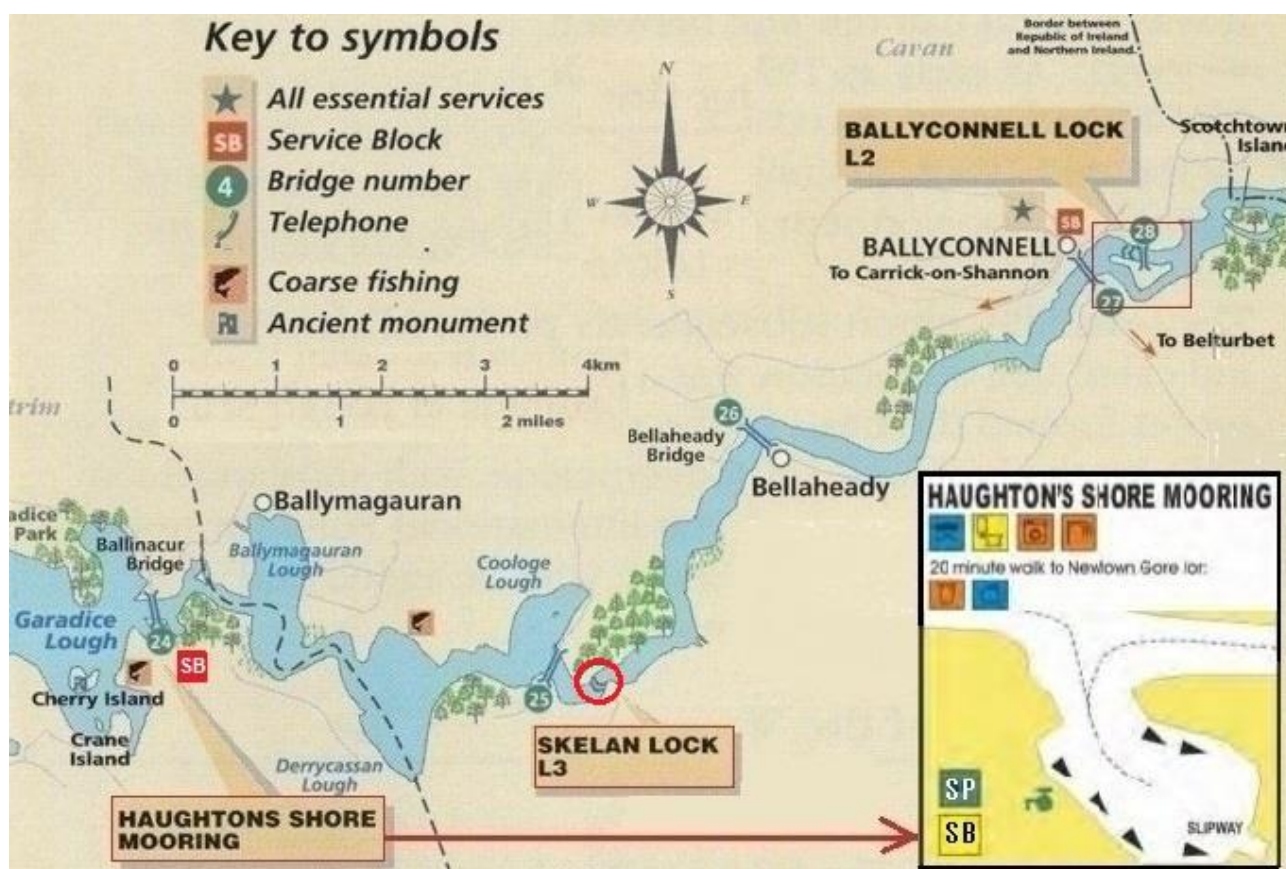
クルーズ初日の夜の停泊地 **Houghton's Shore Mooring** は思いっきり寂しい岸壁でした。外食しようにも周辺に人の気は全くなく、当然ながら食べ物屋も食料品店もありません。岸壁には照明もないので日が落ちると、辺りはもう真っ暗、物騒と言えば物騒ですが、こういう岸壁で一夜を過ごすのは運河クルーズでは良くあること、私たちは人がイナイというその事自体に不安を感じたことはありませんでした。(人が多い方がヤバイ?)

そんな泊地も、最近の様子をネット検索してみるとかなり賑わってきているようです。それはここに限ったことではありません。私たちのクルーズ初回は1997年、最終回・4回目は2009年の事でしたが、この10年余りの間にも各運河の交通量はずいぶん変化していたと思います。それが近年になるとますます加速してきたようで、ネットで現在の各運河の様子をみると、私たちが初回に見た光景とは全く違っているみたいです。

人々の自然志向が強まって、人が混み合う都会より運河クルーズのように静かに気ままに自然の風物にジカに触れたい、という傾向が強まってきたのではないかと。しかもボート・クルーズは私達のようなジ・バ・ペアでもOK、誰でも簡単に日常離れができます。



上の左の画像は私たちが行った頃のこの泊地の様子、右はいつ頃の物かハッキリしませんが多分 2010 年台半ばと思われます。 左右の画像の角度は少し違いますが同じ場所であることは間違いありません。 この通りどちらも真昼間なのに人っ子一人見えません。 停泊しているボートの数は全く違います。 違いは写っている船の数だけでなく、岸壁沿いにあった数本の木も殆どが伐採されてなくなっていますし、右の画像左手前には小さいながら建物も見えます。 次は最近の水路案内マップの一つです。



マップ左辺が初日に通った Garadice Lough で、湖の名前のすぐ右にある 24 の白抜き数字が入った緑の小円の位置ががこの泊地 Haughton's Shore Mooring です。 24 の数字はこの運河の西の始点から数えた橋のナンバーです。 私たちが行った時にはまだこの橋はな

かったはずですが。又そのすぐ右下の、白抜きの **SB** の文字が入った赤の小さな正方形、

これは **Service Block** の略で、前の右側の画像の左手前の小さい建物がそれです。

SB の詳細説明がマップ右下の正方形の上辺に示されています。この正方形は泊地の案内図ですが、黒い小さな三角はボートの係留場所、岸壁の傍の緑のマークは水道の給水弁の位置を示しています。又、この正方形の左下に見える緑の四角に白抜きの **SP** の文字は **Sewage Pump-out**=下水排出装置の略、要するに汲み取り施設です。ボート生活で生じる下水を水路へ排出するのは厳禁で、下水は全て船内のタンクにためておきます。少人数で4~5日なら何とかありますが、それ以上の長期になると排出が必要になります。

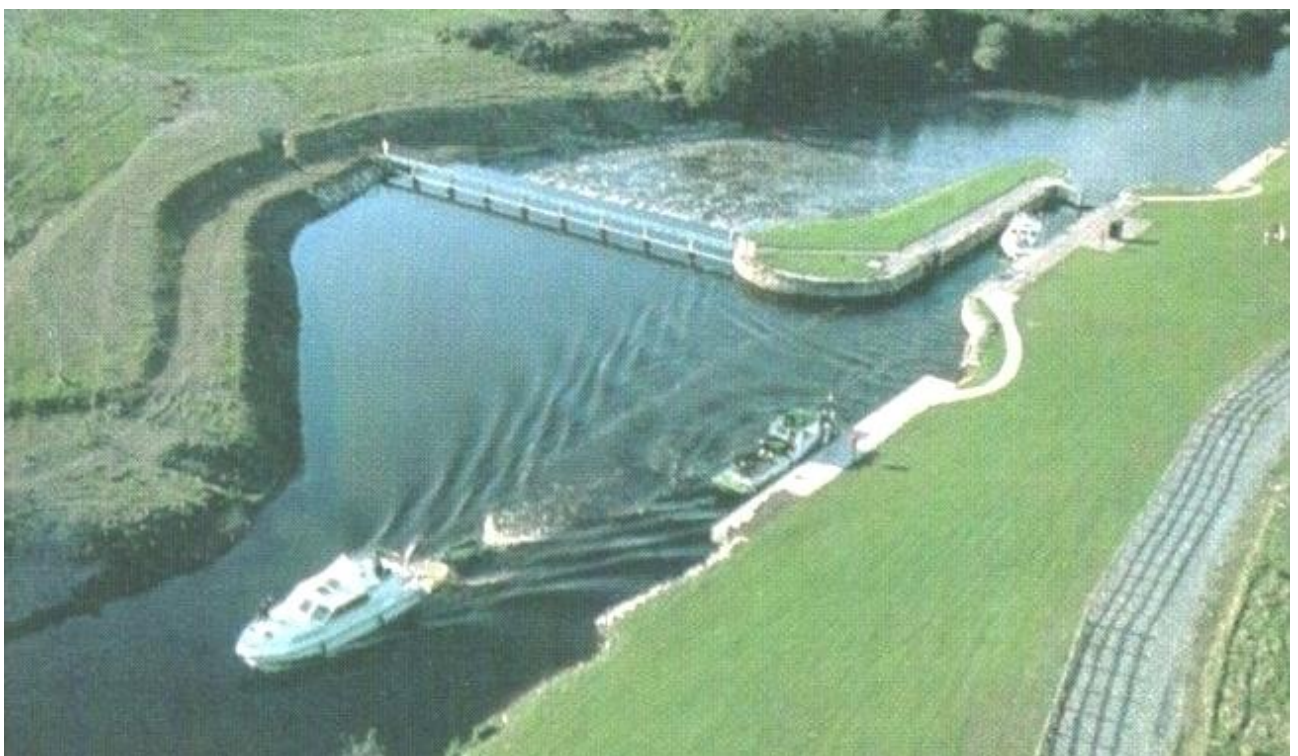
下水タンクがあふれるようなことになったらソリヤもう大変、ですからね。

次にその下の **SB**、これが上記の **Service Block**=サービス提供所で、サービスの内容は案内図上辺に並んでいる様々な色の4個の小さな正方形で示されています。各マークがボヤケてしまってはつきりしませんが、上段4個は左から、**Picnic Area**=屋外 **BBQ** 場、トイレ、ランドリー、シャワー・ルーム等の設備がある事、下段2個は徒歩20分ほどの **Newton Gore** という集落に行けば **Pub** や食品雑貨売り場もありますヨ、と言っています。

これだけ揃っていれば数日間停泊しても何の問題もありませんね、でも私たちが行った時はまだここには前出の左側の画像のように何にもありませんでした。

この停泊所での初日の夜はオウチご飯で静かに過ごし、翌朝、東に向けて再スタート。

二日目の最初のイベントはクルーズ二番目のロック通過、次がその **L3 Skelan Lock**。



これは前の案内マップ下辺中央付近に赤丸で囲んだ二つの山形で示されています。 小さくて見にくいですが山形のトンガリが左下に向かっているのが分かると思います。

山形の向きが上の画像の左下方向、要するに水面の高い方向を示しています。

このロックも前号で触れた L4 ロック同様の自動操作、この **Shannon-Erne Waterway** にある 16 基のロックは全て **Smart Card** による自動操作になっていてとてもラクチン。

出発点 **Riversdale Farm** は画像左下方向、これから向かう **Ballyconnell** は右上方向です。

上の画像の右上に小さな白いボートがいる所がロック。 その左側で泡立っているのは **weir=堰**、そのすぐ手前はキャナル・ウォークの歩行者用の橋です。 このようにロックを設けてある水路は大なり小なり水面に落差（高低差）があり、その高低差を解消するためのバイパスとしてロックを設けるわけですが、元の流れの落差がなくなるわけではありませんからこのように堰を設けるか、又は落差のある急な流れをそのまま残すか、ということになります。 しかし、流れを自然のママに放置するとロックの上下両側の水位のコントロールが難しい、従って、水面の高さを調節できる堰を設ける事が望ましいのです。 この画像では堰のある流れが左上に曲がっていて、バイパスであるロックのある水路は直線的ですが、ここではこれら全体が人工水路です。

次のロック L2 **Ballyconnell Lock** では、人工水路と自然の川の流れとの対比がもっとはつきり分かります。 前の水路案内マップ右上の赤枠の長方形部分を拡大して見ましょう。



これが前のマップの赤線で囲んだ部分の拡大、右上赤の円内にあるのが L2 Ballyconnell Lock です。 この辺りでは人工水路である Shannon-Erne Waterway と自然の流れである Woodford River が交互に入り混じっている、というか、混在しているのです。

運河・Shannon-Erne Waterway を建設する際、この辺りでは自然の流れ Woodford River の一部を利用したのです。 地面をゼロから掘り進む人工水路より自然の流れに少し手を加えて船が安全に通れるようにした方が時間も経費も節約できるので極力川の流れを利用します。 これは内陸水路を有する欧州各国で採用している共通の方法です。

図の下方に U 字型に湾曲しているのが自然の流れ Woodford River で、人工水路が出来る前、川はこのように蛇行して流れていたはず、川は左下から右上へ流れています。

また、画像上部に一部直線を交えながらロックに向っているのが人工水路です。

ここでは、weir=堰の位置は元の Woodford River と人工水路 Shannon-Erne Waterway の分岐点にありますからこれまでに述べたそれぞれの関係、本来の川とバイパスの関わりが良く分かりますね。 上のマップの場所を空中撮影で見るとこんな様子です。



ところで、話は前後しますが、昨夜の泊地 Hauton's Shore Mooring では、朝はユックリ起き、自前朝食をこれもユックリ食べて、この日最初のオシゴト Skelan Lock 通過もあつたので、上記のロックの少し手前の Ballyconnell の街で既に昼前になっていました。

そこでこの岸壁でストップ、Ballyconnell の街歩きをして、オヒルもソトメシ。

Ballyconnell Lock と Ballyconnell の街の位置関係は次の通り。



先ほど触れた Ballyconnell Lock が右上隅、中央やや左の橋の手前左側に係留自由・ロハの岸壁がありました。 次の画像は上のマップ赤星の位置から橋に向かって撮ったもの。

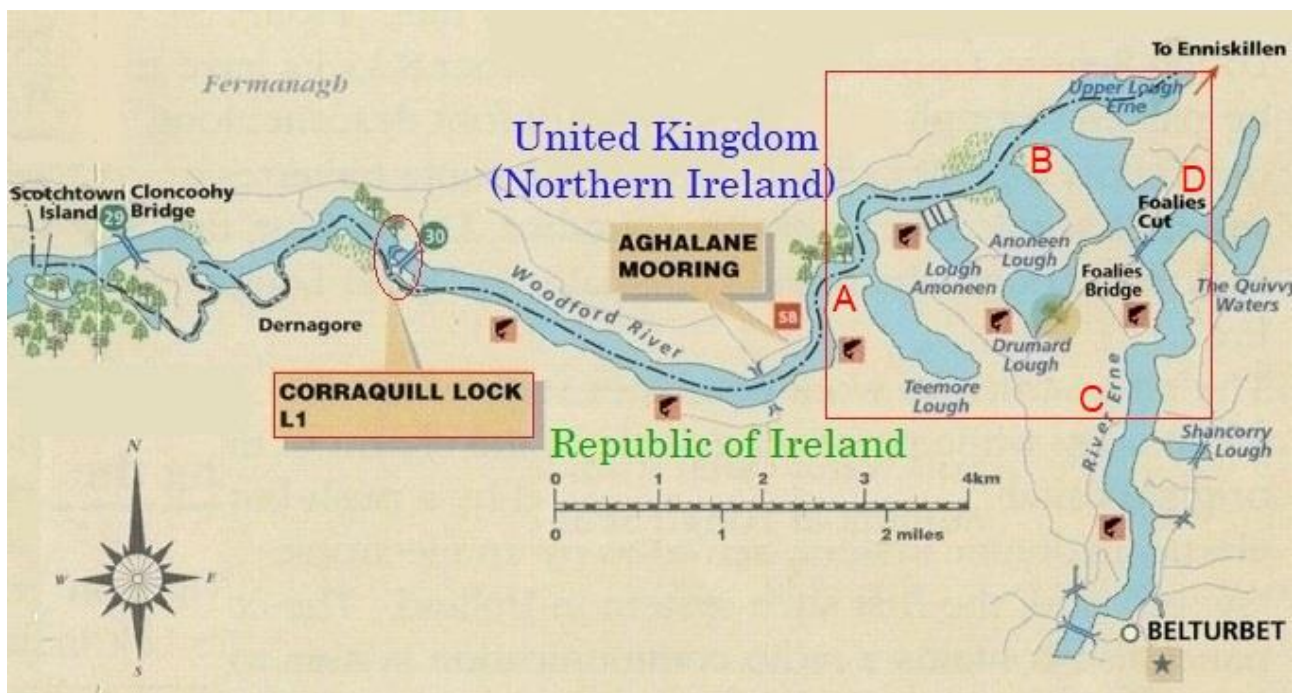


街は画像左奥の木立の向こう側で、Louise の向きは出発点 Riversdale Farm の方を向いていますから、これはこの日のものではなく、帰り道に寄ったときの写真です。

次が水路とほぼ平行に走るメイン・ストリート。 こんな風に緩やかな坂の静かな街、超ジミヘン。 でもギネス、サンド、アイリッシュ・コーヒーには事欠きません。



Ballyconnell の街での昼食後、前出の L2 Ballyconnell Lock を経てさらに東へ。
最初に示した水路案内マップの右端が次のマップの左端に繋がります。



この日の三つ目のオシゴトはこのマップの中央やや左、L1 Corraquill Lock 通過です。オシゴトと言っても先の L2 同様、この水路のロックは全て自動制御だから楽なモンで、全くのトシヨリ向き。（この時、ワタクシメはまだ現役水夫でしたから 100%OK）上のマップ左端から Woodford River に沿って黒色の一点鎖線が走っていますが、これはアイルランド共和国（英語名 Republic of Ireland）と北アイルランド（英語名 Northern Ireland=United Kingdom）の国境です。

ご存じのように両者間の紛争は長年に及んでいます。 私たちがクルーズをした 1999 年頃には一応の落ち着きはあったものの、やはり小さなトラブルは時々あったようでした。近年は目立った事件は起きていないようですが、それでもこれで全てが解決・オワリとは思えません。 ここに限らず宗教の絡んだ対立はハンパじゃありませんからね。この時点で、陸路での国境通過にどういう手続きが必要だったのか知りませんが、水路上では特別なことは何もありませんでした。 それどころかドコが国境なのか地図で確かめない限り全く分かりませんでした。 私たちもこの後複雑に曲がりくねった国境を、あっちへ・コッチへ何度も通過しましたが、全て無意識のうちの事でした。

Corraquill Lock 周辺を拡大して見るとこんな具合。 これがこの Shannon-Erne Waterway の 16 基あるロックの一番東、この水路では橋の数は西から数えて番号を付けますが、ロックの数は東から数えます。 だからこの番号は“L1”なのです。



前の Ballyconnell Lock 同様、ここも Woodford River の流域ですから曲がりくねって流れ

るのが川の本流、直線状でロックのある方が後から出来たバイパスの人工水路。 国境を示す実線は当然ながら自然の流れに沿っています。 流れは左上から右下へ、ここにもや

はり **weir**=堰があり、人工水路によって出来た島の上端近くの白色線がそれです。

堰のすぐ上流に見える茶色の線はキャナル・ウォークを楽しむ人たちには不可欠な、歩行者用の橋 **pedestrian bridge** です。 アイルランドでも人工水路の岸には大抵遊歩道が設けてあります。 しかし、**Shannon-Erne Waterway** のように自然の湖水や川を利用して

いる部分では遊歩道を造るのは簡単ではなく、水路全域に有る訳ではありません。

それでも、このようなロックの周辺には必ずと言っていいくらい遊歩道がありますから、

堰の近くには大抵 **pedestrian bridge** もあるんです。



このロックを過ぎると、以後は多くの小さな湖水が繋がった部分に入り、この日の停泊予

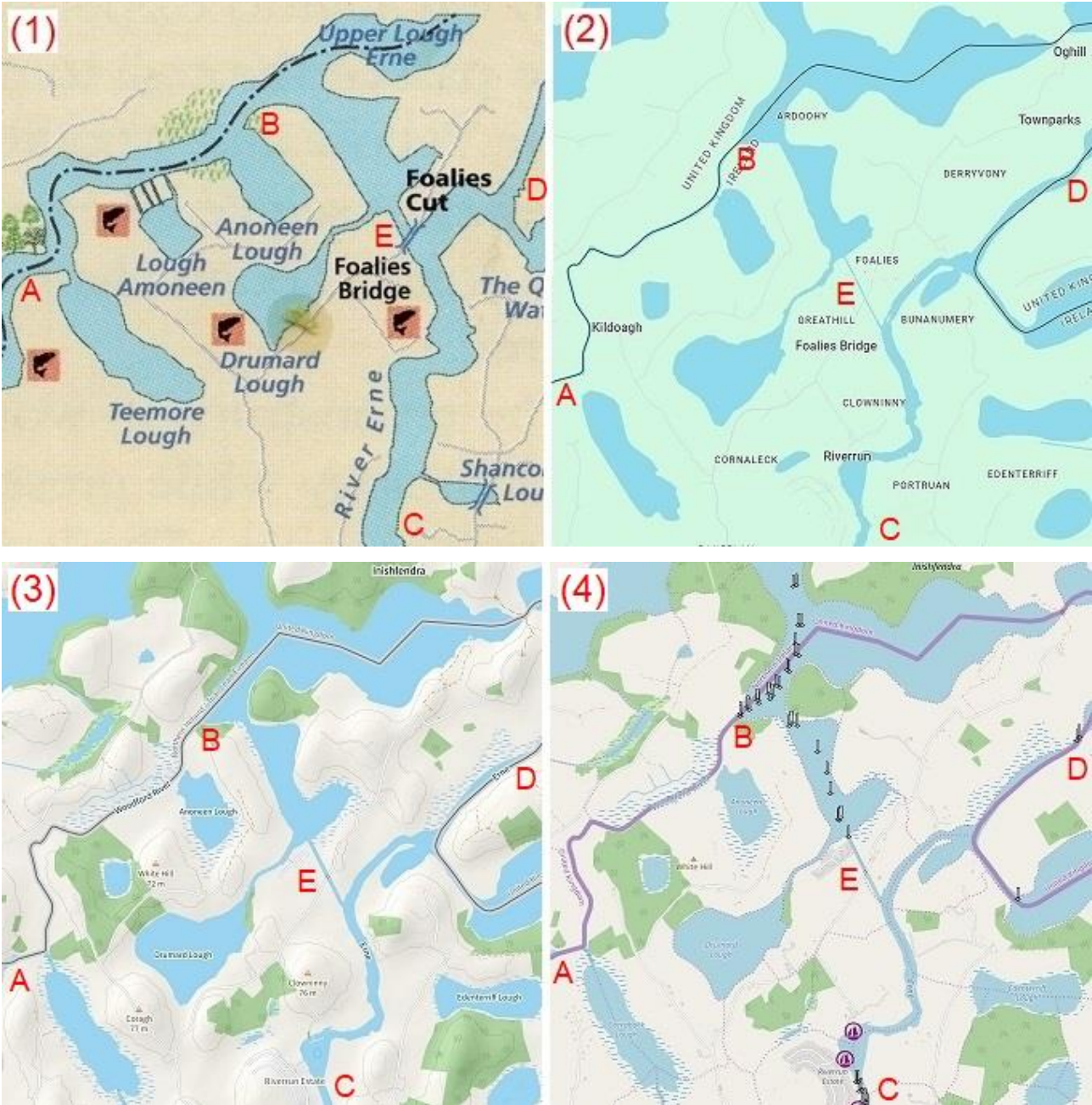
定地 **Belturbet** 迄はごく一部だけが人工水路で、あとは殆ど自然の水面が続きます。

さてここで、三つ前の水路マップ右半分 **Aghalane Mooring** (係留所) の右手赤枠部分にご注目。 この界限では人工的な水路は少なく、自然の小さな湖水や川を繋ぐ一部分だけに人の手が加えられています。 こういう場所ではこのような案内マップではどのように進めば自分の目的地に行けるのか判断が難しくなります。 何故ならこの水路案内マップは水路に設けられた設備や観光・娯楽施設の案内が目的で、地形図としての精度は全くオソマツだからです。 ここで三つ前の案内図右上の赤枠部分を他の色々な地図とで比較し

てみましょう。 次の4枚の図をヨークく較べて見てください。

マズ左上の (1)、これは三つ前の水路案内マップ右上に赤線の四角形で示した部分、他の三枚は別の地図からほぼ同じ区域を切り取ったものです。 (2) (3) (4) の三枚では色付けは多少違いますが湖水の形や大きさなどはホボ同じです。 同じ地域を示しているんだから同じ形になるのは当たり前、とも言えます。 しかし (1) は他の三枚とは全く別物に見えます。 それがこのような案内マップの最大の弱点。 ボートを安全な水路に沿って進める参考にはなりません。 船乗りが使う海図はこのどれよりも精密・正確です。

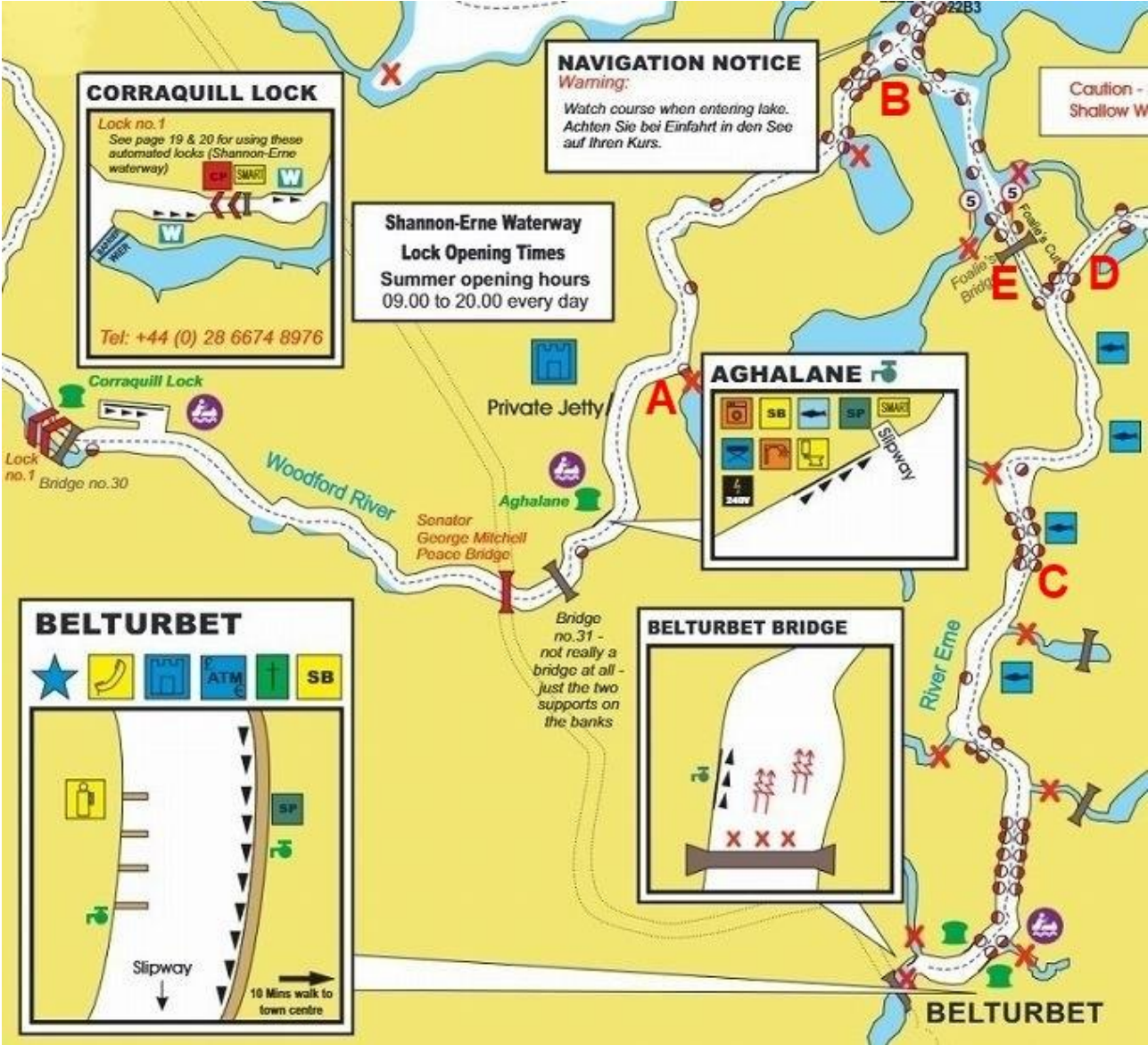
(2) はご存じ G マップ、(3) は OSM、(4) は同じく OSM の船舶用に特化された地図。



これら 4 枚の図上の A・B・C・D・E の各点は同じ地点に私が勝手に振り付けた記号です。 A~B 間は Woodford River、C~D 間は Rver Erne です。 そして 様々な色の曲線 (1. では一点鎖線) は先ほども触れた UK とアイルランドの国境です。 また E 地点の直線状

の細い水路は、これら四つの図の区域内では唯一の人工水路部分、Foalies Cut です。

それではもう一つ別の水路案内マップを見てみましょう。



これも案内マップですから地理的正確度は劣りますが、前の (1) よりはずっとマシです。特にいい点は、航路標識と進路がしっかり示されているので、自分の行きたいところへ正確に行き着けます。例えばこの日の目的地は River Erne の C 地点よりもっと上流の Belturbet ですが、そこへ行く順路をたどってみましょう。尚、A~E の各マークは前の 4 枚の図と同じ地点です。マズ A 地点から Woodford River を下り、河口部 B 地点で右に曲がって Foalies Cut の E 地点に向かいます。Foalies Cut をぬけて River Erne に出たらまた右に曲がり、川をさかのぼり C 地点に至ります。Belturbet はこの少し上流。

このマップの黒の点線は国境線ではなく、ボートの進路を示していて明解です。もう一度 (1) のマップを見て下さい、全然違いますね、これは NG。ボートを進めるうえで何より重要なのは、進路と navigation marks = 航路標識が表示されていること。

Pub や食品店がどこにあるか？も大事ですが、それより道に迷わず、且つ安全確保の方がもっと大事。 この案内マップで示されている赤白のマークの実物は次のようなものです。



まず左の画像、船乗りはこういう風に水底に打ち込んで立てられた標識を、立標=beaconと呼んでいました。 この内陸水路では navigation marker というようです。 このように杭の上についている半円形の、白い方なら安全に通過できる、白鳥が羽ばたいている赤の側は危険だよ、ということ。 多分そっちには浅瀬があるんでしょう。

次に右の画像、ここでは水路の両側に標識が立っていて、当然ながら水路中央側は白色、岸の方は赤になっています。 こういう比較的狭い水路なら中心付近を走れば安全、それは標識がなくてもある程度解かりますが、次のような所ではそんな勘はアテになりません。



こんな風に広い水面でなんの標識もなかったら、どこを走れば安全か？水面上を見ただけでは到底判断できません。例えばこの右手一番手前の立標のすぐ右側に水草が生えていますね、これはその下に浅瀬があるという証拠です。しかし左手の立標の周りのように草が水面上に頭を出していなかったら、そこに浅瀬があるかどうかは分かりません、草が生えていない浅瀬だってあり得ますからね。でも、この標識があればその白色側を通ればこの水路の制限喫水 1.2m までは底触せず安全に航行できる、ということが確実です。

左右の標識の間は、ボートが安全に通過できる水深が確保されているのです。

人工水路は岸近くまで掘り込まれていますから危険は少ないですが、自然の川や湖水では岸から離れた所でも、どこに座礁の危険がヒソソでいるか分かりません。

前出の (4)、船舶用に特化した OSM で、E 地点 Foalies Cut の辺りを見てみましょう。



ナニセ、大の地図マニアですから終日見ても飽きることはナイのです。

B・E は前出の四枚の地図と同じ地点表示です。 マップ左辺から B 地点に向かうのが Woodford River で、紫色の国境線と重なっています。 B 地点はこの川が Drummard Lough にそそぐ川口で、ここが Shannon-Erne Waterway の東の始点とされています。その B 地点から青の実線のように、立標伝いに北東方に少し進んだ所で右に曲がり南南東に向かいます。ここで曲がらず、そのまま北東方に進めば北の Enniskillen 方面へ至ります。右に曲がったあと、立標伝いに南南東方向に進むと E 地点 Foalies Cut の入り口へ、以後直線の人工水路に入ります。F 地点で Foalies Cut を抜けるとそこは River Erne。River Erne に出たら、更に図の下方に向かい欄外迄川を遡ってゆけば Belturbet に行きつく、というわけです。 Foalies Cut を空撮画像で見るとこんな具合。



左上から右斜め下に向かう水路が **Foalies Cut**、殆ど直線でいかにも人工水路ですね。
Cut の左側には前庭付きの小綺麗な住宅地が見えるし、そのさらに左側の水路にはマリーナの棧橋もあります。これはボート係留棧橋付きの“**Foalies Bridge Holiday Home**”というクルーズ客用のレンタル・ハウスです。

この施設に関する記事を見ると **bungalow** とか **lodge** などと言う単語も見えますが、とんでもない、4 ベッドルームとか、3 バスルームとか、各種調理器完備の広々したキッチンやダイニング・ルームもあり、私たち日本人の感覚では高級建売住宅と言ってもいいような、快適な生活設備が全て整った宿泊施設です。

しかも係留棧橋もついていて、マイ・ボートで運河クルーズを楽しむ人達が、ユツタリ・ノンビリと時を過ごすにはもってこいのロケーション。勿論レンタル・ボートもあるのでしょう。私たちがここを通過した時は、この施設はまだありませんでした。

Cut の中間点から **River Erne** 側に少し進んだ所に **Foalies Bridge** という橋がありますが、その上から南南東 **River Erne** の方を見たのが次の画像。



ここは人工水路ですから岸線すれすれまで掘削してある筈で、底触の恐れはないはず。

それどころか両岸はみっしりと木が生え茂っていて、その枝を避ければいやでも岸から離れた水路中央を通ることになります、だからここでは立標がなくても安全です。

次は橋の南側のボート上で、反対方向・北北西 Drummard Lough に向いて撮った画像。



遠く立標が見える所が Lough 南端。 こうしてボートから見ると空撮や橋からでは狭く見えた水路も、結構広い水面ですね。 幅 10ft (3.05m) の Louise が通るにはスカスカ。

さて Cut を抜けるとイヨイヨ River Erne に出ます。 私たちがクルーズを始めた地点 Riversdale Farm は Shannon-Erne Waterway 上の一点でしたね、そもそもこの運河の名前は River Shannon と River Erne を結ぶ水路、という意味です。

ところで、2 頁前の 14 頁で Woodford River が Drummard Lough にそそぐ川口の B 地点が「Shannon-Erne Waterway の東の入り口」と言いましたが、これは決して私の見解というわけではなく、この運河に関する様々な資料にそういう記述があったのでその受け売りで記しただけです。

でも、改めて考えてみると Shannon-Erne Waterway という運河の名前から見ても西の端点は River Shannon との接点であり、東の端点は River Erne との接点になるべきではないかと思います。 Shannon-Erne Waterway は Shannon 川と Erne 川を結ぶ水路だと言える、即ち、14 頁のマップ右下の F 地点こそがこの水路の端点（東の始点）と言えるのではないかと考えました。

そこでシツコク調べてみるとこんな記述も見つかりました。



The Shannon–Erne Waterway (Irish: *Uiscebhealach na Sionainne is na hÉirne*) is a canal linking the River Shannon in the Republic of Ireland with the River Erne in Northern Ireland. Managed by Waterways Ireland, the canal is 63 km (39 mi) in length, has sixteen locks and runs from Leitrim village in County Leitrim to Upper Lough Erne in County Fermanagh.

上のマップと記事は Wikipedia の資料の一部ですが、左右のマップは運河の西・東それぞれの端の部分を取り切ったもの、マップ上の赤線が Shannon-Erne Waterway です。

左のマップの中央 Z 地点は赤線の Shannon-Erne Waterway の西端で、River Shannon との合流点であることは明快です。一方、右のマップ B 地点は何度も登場した Woodford River が Drumcard Lough にそそぐ地点で、赤線の東端でもあり、先に触れたように他の資料でもここが終点とされているのですが、River Erne からはかなり離れた地点です。

この水路と River Erne の接点はマップ右下の F 地点です。

(Z・B・F の文字は私が勝手に付け加えたもので原図には記入されていません)

上の記事の赤のアンダーラインの部分を見ると「この水路はアイルランド共和国の River Shannon と北アイルランドの River Erne を連結する運河である」となっています。

左のマップの赤線の西端 Z 地点はその通りですが、東端 B 地点は River Erne とは直接接していませんし、Foalies Cut から River Erne に出る F 地点、即ち水路が River Erne に合流する地点は、北アイルランドではなくアイルランド共和国領内です。

また、青のアンダーラインの部分では「この運河は Leitrim Village から Upper Lough Erneに通じる」と言っています。この記述も赤線の西端 Leitrim に関してはその通り

ですが、東端には疑問が残ります。何故なら Upper Lough Erne の区域もイマイチはっきりしないのです。そこで Upper Lough Erne の線引きはどうなっているのか、さらにシツコク調べました。

疑問の要点は、B 地点で Woodford River がそそぐ湖水 Drummard Lough が Upper Lough Erne の一部か否かということ。そして、こんなマップを見つけました。



左のマップでは赤線で囲まれた水面の全て、即ち右のマップで Drummard Lough と表示された部分も含めて Upper Lough Erne だと言っています。一方、右のマップでは中心部から上の点線で囲まれた部分が Upper Lough Erne となっていて、Drummard Lough は含まれていません。赤の B 地点は前出の Woodford River 川口ですから、左のマップなら前出の青のアンダーラインの記述通りですが、右のマップでは「Upper Lough Erne にそそぐ」とは言いかねます。

しかし、さらにこの記事のオレンジ色のアンダーラインの部分を見ると「この運河の長さは 63km である」と明記してあって、この数字は他の色々な資料でも同様で、全てに同じ記述が見られます。ということは、やはり始点と終点の二地点がきっちり決まっていることを示しています。西の端は Z 地点で揺るがないとして、東の端はやはり Woodford River 川口の B 地点である、と理解せざるを得ないようです。まあ、この辺りの繋がった水面は全て「River Erne 水系」と言っている資料もありますから、Shannon-erne Waterway が「River Shannon 水系」と「River Erne 水系」を繋ぐ運河であることは確かです。些細な事にクドクド言いがかりをつけるのはこの辺で、次に進みましょう。

次のマップは Foalies Cut を抜けた後、Belturbet 迄の川筋を示しています。左のマップ

F 地点で Foalies Cut から River Erne に出て、マップ下辺（上流）に向かいます。

左マップ下辺の赤星地点が右のマップ上辺の赤星地点に繋がります。



ここは人工水路ではなく River Erne の自然の流れですから川岸近くには浅い所が散在します。 そういう所を避ける為、あちこちに立標で安全な進路が示されています。

Louise も次のマップのように立標に案内されて青線に沿って上流に進みます。



そして、イヨイヨこの日の目的地 **Belturbet** に到着です。

上のマップ左下に道路標識の進入禁止と同じのマークがありますが、この橋 **Kilconny**

Bridge の手前でこの川の可航域はオシマイなのです。

川はまだまだ上流に続きますが、ボートの航行は止められています。何故なら、もなにも、次の画像を見れば誰が見ても、こりあダメダ、と納得でしょう。



これは上のマップ左下の **Kilconny Bridge** の上から下流を見た画像です。

左手に見える栈橋が **Louise** を舫った **Public Mooring**=係留自由・無料の栈橋です。

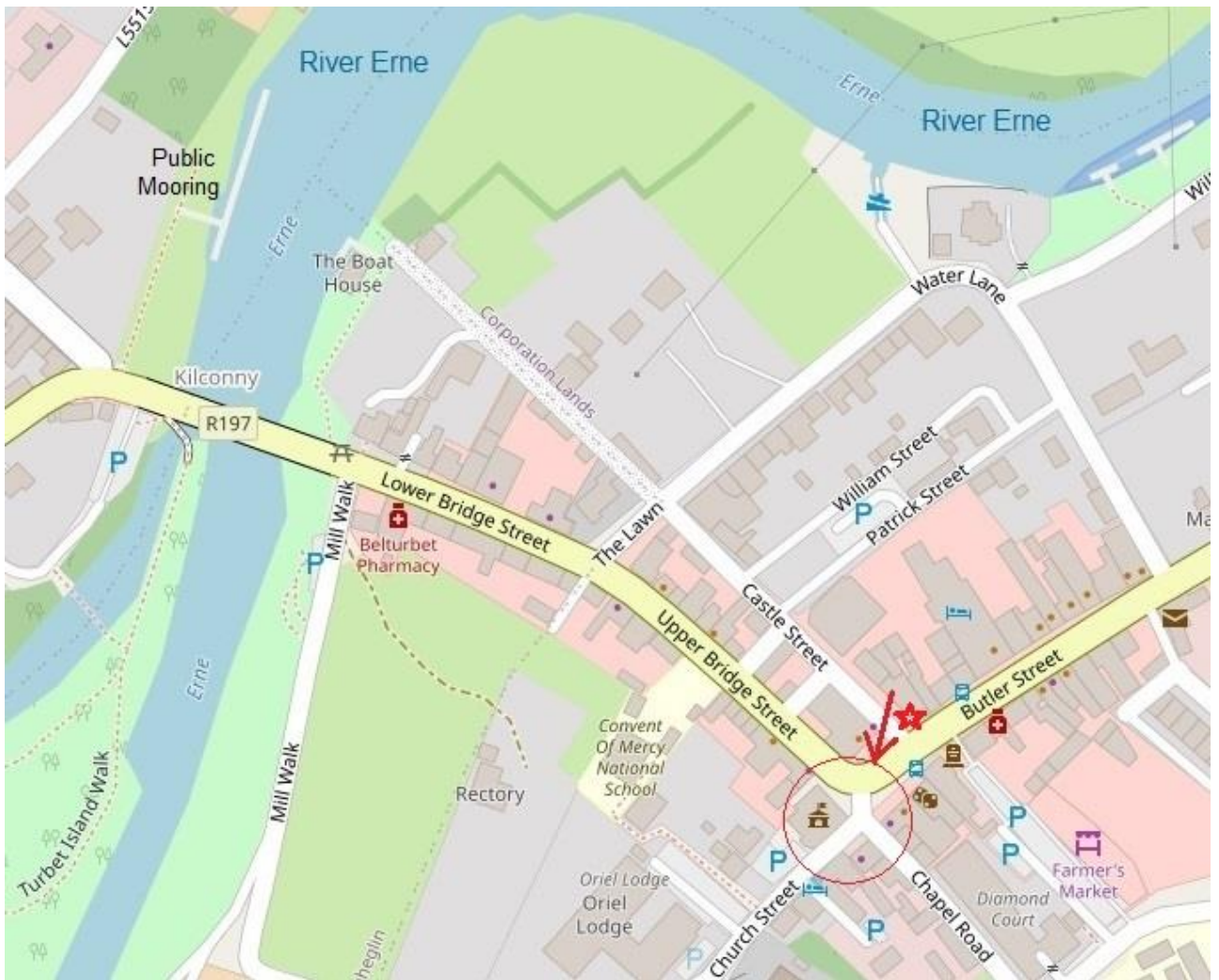
川の真ん中に見えるのが例の赤白の表示のある立標、この画像で立標の右側は赤で危険。この立標と栈橋の間一番手前にもう一つ立っているのが先程の進入禁止マークの立標です。そこから橋の下までの水面はさざ波が立っているし、あちこちに石ころも見え、セセラギが聞こえそうな感じ。これじゃ、カヌーだって底をコスってしまうでしょう。

前のマップでは橋の上流（左下）に薄緑の部分があります、以前はそこも浅瀬だったのでしょうが現在は既に中州になっていて木々が生い茂っています。

近頃、日本だけでなく世界各地の豪雨災害が頻繁に報じられていますが、自然の川の流

これは、たとえダムを造っても人間が 100%コントロールできないのが実情です。
この辺りは緯度的には日本列島よりはるかに北の北緯 54 度台ですがメキシコ湾流の影響
で冬の気候は北海道より暖かく、降水量は年間を通じて関東界隈のそれより低いらしい。

でも、最近の世界的異常気象では、この先どうなるのかは ??? です。
この川の流域も我々災害大国の人間の目には甚だヤバイと感じられます。 最近の日本で
度々起こる集中豪雨のようなことがあると、どうなるか甚だ心配でもあります。
とにかく、Louise は可航区域ギリギリ一杯迄遡り、橋のすぐ手前右手（マップ上では左）
の公設無料棧橋に係留し、その日の宿としました。 Belturbet の街はこんな様子。



マップ左上が Louise を舫った公設棧橋。 上陸して Kilconny Bridge を渡ればすぐ市街
地というきわめて便利な棧橋でした。 前夜の寂しい係留場所とは大違いです。
左下が例の中州ですが、空撮画像では左辺の水面が見えないくらい、うっそうと木々が生
い茂っています。 このマップによれば“Turbet Iland”とその名も「島」になっていて、
図に表示されているように自然遊歩道も設けられています。

Public Mooring のすぐ下流に続く二つの大曲り蛇行に影響されて、多分この辺りでは川の

流れが極端に遅くなっていたのでしょう。

それ故この辺に土砂がどんどん堆積して浅瀬になり、中州になって木々が生い茂り、ついには自然遊歩道まである「島」になってしまった、というワケ。

Belturbet はランチに寄った Ballyconnell より少し大き目の街でしたが、同じような緩やかな坂の街でした。上のマップの赤矢印の角度で撮影したのが次の画像。



マップの赤い円の中はこんな具合。

正面右手のツートーン・カラーの二階建てが Belturbet の Town Hall、そして、この建物の前の交差点がちょっと変わっています。

Town Hall の右手に下ってゆくのは Upper Bridge Street、この通りは途中から Lower Bridge Street と名前を変えて Louise の係留地傍の Kilconny Bridge に至ります。画面左手前はメインストリート Butler Street、左辺に直角に曲がって上ってゆく路地が Chapel Road、そして Town Hall の左側の壁と中央奥の教会の塔の間に進むのが Church Street。いわば変形の十字路ですが、ここをなぜか “Diamond” と呼ぶらしい。

もう一度市街のマップに戻って赤円の周りを見て下さい。

マップ右辺中段から赤円に進んで Town Hall に突き当たるのが、この町のメイン・ストリート Butler Street、そして Diamond のワン・ブロック手前で交差するのが Castle Street。

その交差点の角にある小さな赤星、それが次の画像。



この角にあったのがこの Café。英国でよく見かける All Day Breakfast。アイルランドでもこういう風習は同じなんですネー。小さくてちょっと見にくいですが、店名の上の壁に両方の通りの名前が表示されていますね、左側が Castle Street、右は Butler Street。最近のストリート・ビューで見ると、この角にあるのはやはりカフェですが、壁の色も店名も全くの別物になっていました。

結局この日はここで breakfast、ならぬ supper ということになりました。味は???

やっぱり breakfast にしときゃ良かった、但し Guinness 付きだからナントカ・・・。

では、今回はこれで。

*

次回更新予定は 12 月 7 日（土曜）の予定です。